慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	海外史壇紹介(一) : 最近のフランス革命史學界
Sub Title	
Author	鈴木, 泰平(Suzuki, Taihei)
Publisher	三田史学会
Publication year	1949
Jtitle	史学 Vol.24, No.1 (1949. 10) ,p.123- 127
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19491000-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

海外史壇紹介（一）

最近のフランス革命史學界

革命の專門雜誌「フランス革命の歴史的年誌」Annales Historique de la R. F.（一九四六年）に依ればフランス革命史研究を漸く本来の面目に立帰つたものゝやうである。

以下雜誌（四分册）に表はれた主要研究の動向と革命史学界の簡單な展望を行ふことにしよう。

全般的に見てフランス革命史学の戰時に歩んだ道は極めて困難であつたやうである。其の良い証拠としては本年誌の一九四一年より四五年までの休刊を挙げることが出来る。更に Sagnac サニヤック編輯の「フランス革命」も漸く一九四七年に至つて復活したと伝へられてゐる所を見ると革命史研究は少くとも五ケ間沈默したことになる。然しこれは雜誌に関する限りのことで個々の研究には極めてレベルの高いものも発行されて居り、革命史学全体の沈默とは云ひ切れないものがある。

処でフランス革命史の研究に主導的立場を持しその中核的位置を保つてゐるのは、Sorbonne のオーラール講座であるが一九三七年より四一年に亘つてその位置にあつたのはジョルジュ・ルフェーヴル教授である。教授は戰後も大学当局の請に依りその責任者の地位に就いてゐたが一九四五年の初頭で講義を止め引退した。年誌の語る所に依ればその理由は主として政府、大学当局との行き違ひ、俸給問題等にあるようである。扨この巨人の去つた後ソルボンヌは多大の時日をかけてナンシー大学教授デュナン M. Dunan 氏を後任と決定した。デュナン氏は同じく歴史家であつた Maurice Dunan を父とするナポレオン研究のエキスパートである。その従来の研究は「メッテルニヒ研究」を中心とし、どちらかと云へば極く地味なコースを歩んでゐた人であるが一九四三年に発表された「ナポレオンとドイツ」Napoléon et Allemagne. Paris, 1942. Plon. は革命史学界の絶讃を博し一躍その地位はラブルースと並ぶものになつたのである。革命史学界では今後マルク・ブロック M. Bloc. ジョルジュ・ミッション G. Michon 亡き後、最も活躍を期待されるものと思はれる。

さて革命研究の一般的動向を探るには一応一九三九年のフランス革命百五十年祭を省りみる必要がある。ピェール・カロンの報告に従へばかなりな大規模の史料整理が企劃され、又百五

十年祭を祝つて多くの出版物が刊行されたやうである。

企画された大規模なものとしては Catalogue du L'Histoire de la Révolution Française 革命史文献集成、Corspus (Documents relatifs aux séance des Etats généraux depuis I mai 1789 jus'qua la réunion des trois ordre, le 27 juin) 三部会召集関係文書集、Paris Pendant la Terreur 恐嚇政治中のパリ等の名が見られ、個人的なもの及び特輯されたものとしては G. Lefebvre. Quatre-vingt-neuf「八九年」Daniel Halévy. Histoire d' une histoire esquissée pour le troisiéme Cinquantenaire de la Révolution Française アレヴイ「革命修史学史」Revue Philosophique. La Révolution de 1789 et la Pensée moderne 哲学評論、特輯「革命と近代思想」Ville de Paris. Commémoration du 150e Anniversaire de la Révolution Française 1789-1939 La Révolution Française dans l'histoire, dans la litérature dans l'art, par musée Carnavalet カルナバレー美術館編「歴史、文学、美術に於けるフランス革命」等があり、その他 Europe. Revue de synthése. Cahiers du Communisme 等を始め多くの雑誌で特集号を出し地方誌においても革命記念号を一様に出してゐる。

この他革命史経済関係文書も引き続いて出版されてゐるが残念乍らその詳細は不明である。

一九四〇年代の研究が一応これに基いて新しく出発したのは先づ間違はあるまい。処で年誌に表はれたものは細密を極める実証的な論文と新しい史料の報告に満ちて居り、或る程度スタンダードの労作を読んでゐなければ見当のつかないやうなものが多い。以下主要なものゝ箇單な内容紹介をすることゝする。

年誌の一月—三月号 No. 101 ではルフェーヴル「革命と合理主義」ピレピッチ、ユゥーベール「マスケ、モンタセル事件」、ムーニエ「国民公会派遣地方委員アルヴィト」等の論文が掲載されてゐるが、ルフェーヴルのは革命指導者が如何にギリシヤ以来のヨーロッパ合理主義に培はれてゐるか、革命に於いて如何なる思想が支配的であつたかに就ての積学多年の蘊蓄を傾けた堂々の大論文である。

教授の主張は実験科学に於ける合理実証主義はその儘歴史に於いて亦今後の歴史の創造に於いて支配的役割を果すべきであると云ふにある。一九四六年一月、ソルボンヌに於けるラショナリスト聯盟会議の演説草稿を基にしたもの。第二論文はソルボンヌの若い学徒に方法、史料を教授するための研究会に於ける報告であるが、論点は一七九三年九月二十九日に於ける生活必需品公定価格令に違反した者の不当な処刑を受けた者に関し純粋なる経済的動機のみがその処刑に際し考慮せられたかどうかと云ふにある。論証は広く革命の複雑な経済問題の所在を暗示しパリのパン供給の困難が一部独占商人の動きに依ることをカルヴェ教授と同様示してゐる。現在の革命研究に於いて如何なる史料と材料が如何に用ひらるべきかを直接に示してくれる好文献と云ふべきであらう。ムーニェのは国民公会より地方派

遣委員として公安委員会の指令を実際に責任地域で如何に行つたか及び従来の不当評価に関する疑問に就いての地味な実証的なもの。材料は主としてオーラールの公安委員会文書集成、エリオの「解放都市リオン」ブレーシェ博士の「アルヴイト文書集」「サボア地方文集」等を使ひ、三号に於いてアルヴイトがエベール派に属している者でもなく単なるデマゴークでもないことを結論してゐる。根本史料に基いた尊敬すべき労作と云へる。

二号（No. 102）はヒスロップ「一七八九年モンタルジ市未刊カイエと三部会選挙」、ローラン「ダントン側近者医師ルイ・サンテックス」、カロン「革命百五十祭」等を掲げてゐるが、この中カロンのは既述の如き文献紹介と革命記念祭に政府当局が如何に無理解であり、補助金も殆ど支出されないパリを始めとする革命記念事業が如何に困難なる條件で行はれたかを詳細に述べたものである。ヒイスロップ嬢は現在ニューヨーク・ハンター・カレッヂの教授、例の革命カイエの大規模な目録作成を企図して賞讃され、同時にその企画に就いてフランス人からその超人間的努力に対して尊敬と忠告を受けた人である。

この僧侶身分の廃止、司法制度の改革、税金の改革、コルポランオンの廃止を求めてゐる未刊行カイエは個人的自由、保証を多く明示してゐる一般のカイエに比較して珍しいものであり、「一七八九年の革命」に於いて、これほどはつきり改革を要求してゐるものは稀であるやうに思はれる。テクストの全文が掲載されてゐるのは便利である。ローランの「医師サンテックス」は三頁に亘る簡単なサンテックスのロベスピエール派とエベール派との紛争に於いて果した役割に就いてのローラン自著の「革命に於けるランス・マルヌ」の見解の修正である。サンテックスはエベール派ではなく寧ろエベールの処刑に参画し、ダントンより早くパリを去つたと云ふのがその修正点である。三号（No. 103）はルフロン「司祭フィルベール、ラファイエットの叛乱とセダン市会」、ブールドン「総裁政府治下の民衆の不満と指導者の不安」及び前掲のムーニエのを載せてゐるが、ルフロンのは一七九二年以降のラファイエットの反抗をセダン市会との関聯に於いて捕へたもの。ヴァレンヌ事件後セダンに於いても八月十日革命まで行かざるを得なかつた経路が司祭フィルベールとアルデンヌ軍のラファイエットとの交渉を中心にこくめいに描かれてゐる。地方史的研究ではあるが自らその問題は恐嚇政治に置かれてゐる。文献は余り一等史料に依存してゐない。

ブールドンのはシェース一派と左派の紛争が結局軍事的独裁に依つて收拾されざるを得ない混乱に満ちたディレクトアールの治政を鋭くついたもの。ナポレオン独裁の歴史的必然性なる命題はルフェーヴルと共により明瞭されたと云ふべきであらう。政治制度の上層ブルジョア的性格が民衆不満の根本原因をなしてゐたのは著者の指摘するまでもない。この不満の根本をつかずに制度の改変を企図する一派と民衆の不満のみを利用して政権維治を計る一派の対立抗争があつた処に所謂ディレクトアールの混乱があつたのである。ルフェーヴルの「ディレクトアール」を是非参照したい所である。

四号（No. 104）はゴドショウ「ルイ十六世の最後の国務尚書エティエンヌ・ルイ・エクトオール・ドウジョリーの覚書」、ローランの「マルヌに於けるダントン」の二篇のみである。ローランのは例に依つて簡單な史料紹介である。マルヌに於けるダントンの勢力の大きいことダントンがセザンヌ地域に於ける教会財産の没收売却に関して巨富を得たことが数字を以つて示されてゐる。いさゝかオーラール、マティエのダントン論爭を思ひ出させる臭みがあり大して興味あるものではない。ゴドショウの発表した史料は八月十日革命に関する従来の定説に重大修正を求めるものになると思はれる。「王権停止」を結果したこの革命はフランス革命の第二期を画するものとして従来多大の史的評価が加へられて来たのは周知の所である。然しその革命が如何にして齎らされたものであり如何なる契機がそれに参與したかについては必ずしも明確ではないのである。八月十日革命が民衆の革命であり、亦革命の根底に流れるものに密接に相通ずるものがある事は此史料に依つてより明確にされるであらう。この中で示されたジロンドのクープの下で王朝の没落を計らんとしたこのドウジョリーの企図はジコバン擡頭の史的背景を明らかにすると同時にルフェーヴルの言を借りて云ふならば民衆の感情の正しかつたことを認識させるものがある。

論文の主要なるものは以上のやうなものであるが次ぎにルフェーヴル自ら批評してゐる若干の主要文献を書評欄から引き出して見よう。

批評されてゐる著書の中量的に一番膨大なのはエヴァール・エリオ「解放都市リオン」第三卷（E. Herriot. Lyon n'est plus. Paris, Hachette, 1939 507p. である。

フランス下院議長エヴアール・エリオのこの書は既に第四卷を出してゐるが、これは主として恐嚇政治に於けるリオンを問題にしたものである。然しその著はルフェーヴルに従へば必ずしも地方的なものではなくパリとの関聯に於いてリオンの地位を明らかにし、革命全般を展望せしめるものがあると云ふ。批評は詳細を極めエリオの若干の判断に就いてははつきり反対してゐる。ジャコバン政策は必ずしも社会主義的性格を持つてゐないこと、リオンジャコバンとパリのジャコバンの間には差異が存すること等はその主なるものである。マルチン・ゲーリングは以前「旧制度フランスに於ける封建制の問題」ヒストリシェ・ストゥーディエンに於いて領主制に鋭利な分析を行つたが、今度は「旧制度に於ける官職売買」M. Göering Die Aemterkaeutlichkeit im Ancien Régime.（Berlin, Eberg. 1938 352p.H. S no.346）に関する研究をものしてゐる。手堅い研究として学者を稗益する所少なくないとの批評がされてゐる。

トンプソンの「フランス革命」Thompon. The French Revolution. Oxford. Blackwell. 1944, 541p. は革命史入門書であるが、保守的、自由主義的オックソニアンの無難なものとされてゐる。「八九年」の英訳者パーマー教授の「十八世紀フランスのカトリックと不信者」R. P. Palmer Catholics and Unbelievers in Eighteenth Centnry in France. Princeton. 1939. 235pはクロノロヂカルな展望に欠けラショナリズの扱い

に難点があるとの批評があるが、十八世紀思想史としては好著であるとの意味の言葉も散見する。アンリー・カルヴェ「ペリ恐嚇政治の方法」H. Calvet, Un instrument de la Terreur, a Paris. Paris 1941 403p は根本史料に基く堂々たる大著であり、制度的な考察の中に自ら民衆運動の基本的性格を呈示したもの、デュナンのドクトーラ論文「ナポレオンとドイツ」M. Dunan. Napoléon et Allemagne. paris. Plon. 1942.755p は誇るべき記念碑的大作、本文より多いテキストで埋められてゐる。ナポレオンのドイツ、バヽリア政策を描いて余す所はない。大陸封鎖の概念の扱ひ方特に「封鎖」と「大陸システム」を混同して用ひてゐるのには異論があると評されてゐる。一九四八年四月第二版が出版された。ヂ・エルロー「コロネル・ブーシッショト」G. Herlaut. Colonel Bouchotte. Paris. 1946 2vol. 331 et 392p. はブーショットを通じて革命軍の構成、運営補給、中央と軍隊付委員の関係を明日にすると同時に政治家としてのブーショットを特にエベール派との関聯より見たもの。ブーショットその人は平凡な一軍人に過ぎないがロベスピエール、サン・ジェストの姿を逆に映し出してゐるものとして、亦ミッシュレー以来の歴史家の判断とは異るものをもつてゐるものとして興味が深い。

以上は年誌を一読した上での極めて粗雑な予備的展望であり概括であつて、原著者評者の眞意を傷けるものも多くあると信ずる。何れ後日より詳細な内容紹介を報告してその責に任ずるつもりであるが、最後に革命史学の展望に関聯して次のことだけは云い得るのではないかと思ふ。

即ち革命史研究は吾人の簡單な展望を許さぬやうな深い思想史的、学説史的伝統の上に立つてゐること、研究として銘打つ以上原史料に対する徹底的な検討がその第一條件になつてゐること、單なる立場、主義、一定の類型的史観に立つものは殆んど問題にされてゐないこと、先人の研究成果に対する検討が必ず要請されてゐること等がこれである。そして「研究」は單なる孤立的なものではなく広く革命全般への展望を可能にするものでなければならないことである。これが可能になり全体との関聯が整つた場合、自らその成果は革命の生き生きした人間的息吹と自由の生命に満ち〳〵た個性的な世界に吾人を高揚させてくれるのである。

（一九四八・一〇・二九　鈴木泰平）